

## 第 8 回平和に関する市民勉強会議事録

文責：浜田

【日時】2007 年 12 月 22 日（土）14:30～16:30

【場所】奈良県社会福祉総合センター6 階第 3 会議室

【参加者数】7 名

【テーマ】正しい戦争はあるか

【概要】前回の問題提起の話の概要を浜田より簡単に紹介した後、橿原市 9 条の会の事務局長をされている大槻烈さんに「正しい戦争はあるか～誰が判断するのか～」と題した問題提起の話をしていただき、その後、参加者全員で話し合いを行なった。

### 【勉強会内容】

[ 1 ] 前回の問題提起の話の概要紹介 … 議事録最終ページに掲載

[ 2 ] 今回の問題提起：

( 0 ) はじめに

- ・「正しい戦争はあるか」というテーマを見て、「正しい」は誰が判断するのか、ということをも最初に思ったので、今回の話の副題を「誰が判断するのか」とした。
- ・前回は最近の事例について話をされているので、今回は歴史をさかのぼって考えてみたい。
- ・今回の話は、平和文化から出ている森田俊男氏の本と、二十数年前に子どもが使った中学歴史教科書を参考にしている。

( 1 ) 人類の歴史と戦争のはじまり

- ・日本では、弥生時代に集落どうしが争いをして小国が出現し、さらに小国どうしが争いをして地域社会が形成されていったのを戦争の始まりと見ることができる。
- ・その後は、国家としての法的な規範が無い中で武力が支配する江戸時代までの無法の時代と、明治以降の法の支配の時代に分けることができる。以降では近現代の世界の動きを中心にみていく。

( 2 ) 「力」「武力」の時代から「法の支配」の時代へ

- ・1500 年代以降、イギリス、オランダ、フランスなどが絶対王政国家となり、それと対抗する形で法の支配の芽が出てくる。その一つがイギリスの「権利の章典」である。国王といえども法・議会を無視できなくなる。
- ・列国成立後の 1500 年代から 1700 年代にかけては、国王、皇帝の戦争を正当化する理論が展開された。
- ・1700 年代後半から 1800 年代には、全ての戦争を合法と見る無差別戦争観が支配した。その時代は兵士と一般人の区別はなく、あらゆる蛮行が容認され、戦争に関しては一切の法が投げ捨てられた。
- ・そうした中、1800 年代後半に、兵士と市民の区別や傷病者・捕虜の処遇に配慮したリーバー法（アメリカ）や、赤十字条約などが生まれてきた。

( 3 ) 再び「無法」「軍事力」の時代へ……1800 年代後半から 1900 年代初め

- ・欧米で産業革命が起こり、欧米列国は商品販売先、消費先を外に求め、アフリカ・アジア・オセアニアを植民地にすべく進出した
- ・日本も欧米列国に遅れながらも明治維新後に富国強兵策を取って、日清・日露戦争により植民地を有するようになる。

( 4 ) 人道法の体系化へ（戦争のルール化）

- ・1899 年 初めての世界的な平和会議・ハーグ世界平和会議開催

- \*1999年にハーグ会議百年を記念してハーグ世界アピール世界市民会議が開かれ、ハーグアジェンタ(課題)が宣言され、アナン国連事務局長に渡された。そこでは10の基本原則が示され、憲法9条のように政府が戦争をしない政策を取るよう各国で運動を強めようということが第1番目に書かれている。
- ・2回目の1907年のハーグ会議では、戦争のルールを定めたハーグ条約が締結された。  
内容は、傷病者の保護、捕虜の処遇、休戦、占領地の人民の処遇についての取り決め
  - ・同年に、永世中立国に対する攻撃を禁止する条約も締結された。
- (5) 三度、「無法」「軍事力」の時代へ……第1次世界大戦へ
- ・今までと異なり、第1次世界大戦では毒ガス、飛行機、戦車、潜水艦が用いられ、一般市民を巻き込んだ総力戦となった。
  - ・日本も参戦し、多くの権益を手に入れた。
- (6) 初の国際平和維持機構の創設……国際連盟の誕生、戦争の違法化
- ・第1次大戦後、国際連盟が誕生。戦争が違法となる時代に入った。  
「加盟国は戦争に訴えざるの義務を受諾し」(前文)
  - ・多くの弱点も有していた。  
違反国への制裁措置がない。宣戦布告しない武力行使は戦争の定義から外れる。アメリカ非加盟。
  - ・1928年不戦条約締結。当時の独立国のほとんどが加盟(63カ国)  
国家間の紛争解決は平和的手段で解決することを原則とした画期的な国際法  
ただし、条約の話し合いをしたアメリカ・フランスも自衛の戦争は禁止していないという解釈をし、その後、自衛の名の下に戦争する国が現われる。
- (7) 四度、「無法」「軍事力」の時代へ……第2次世界大戦へ
- ・日本、ドイツ、イタリアが自衛の名の下に戦争を行なう。
- (8) 再び国際平和維持機構を創設……国際連合誕生、日本国憲法誕生
- ・国連憲章は原爆投下前の1945年6月に審議・採択されている。日本国憲法が国連憲章より進んでいるのは原爆投下後という時期にも関係がある。
  - ・戦争放棄はドイツやイタリアの憲法にもあるが、戦力不保持、交戦権否認までではない。
  - ・それ以降、紛争解決の条項はいろいろ設けられており、平和維持のための歯止めが作られている。一方でそれに反する動きもあり、両方の間を揺れながら進行している。
- (9) 最後に
- ・アジア・太平洋戦争で日本が犯したこと、連合国が犯したことが当時の国際連盟規約や不戦条約のどの条項に反するのかということが戦後処理として明確になっていない。  
何が清算され、何が未清算なのかが不明確なままである。
  - ・「正しい戦争」かどうかは、誰が判断してきたのか。権力者が判断し、それを国民が受け入れてきたのが過去の戦争である。支配する権力者が判断するのか、一般市民が判断するのに大きな違いがある。
  - ・戦争する力に対する歯止めは一人ひとりがしなければならない。憲法に書かれている「不断の努力」によって、すでにある国内法、国際連合規約を含む諸条項を守らせなくてはいけない。仮にそれらが不十分であるなら改正する運動をする必要もあるのではないか。

### [ 3 ] 質疑応答と議論

\* 個人名は記入していません。以下の ( ) 内のアルファベットが同じ発言は同じ方の発言です。  
内容により整理したため、実際の発言の順番とは一部異なっています。

#### [ 心の問題 ]

( A ) 戦争は殺し合いだ。人を殺したらいけないということは国内法でも国際法でも書かれていない。殺したら罪になると書かれているだけだ。そういうことから、戦争を法で抑えることはできないのではないかという気がしている。

戦争にはそれぞれの人間の心の問題が関わっているのかもしれない。仏教では戒めとして人を殺してはいけないと明記されている。しかし公教育では宗教教育は禁止されている。

1937 年に日本が南京を占領した際、国民は提灯行列をして祝った。全体が一つの方向に進んでしまっている時には行列に加わらないという抵抗すらできない。こういう状況は急に起こったわけではなく、明治・大正・昭和と長年に渡って作られてきた。権力には一人では抵抗できない。現在もすでに同じような状況まで来ていると思う。

( H ) 私はまだ今の時点はそこまで行っていないと思う。こういう会の活動などによってそうならないようにしていきたいと思っている。

( B ) 人を殺すことを絶対にしてはいけないという考えが全人類に浸透できたら、その時点で戦争は起こらないと保証される。

( C ) 仏教もキリスト教も人を殺してはいけないと言っている。ただ、ブッシュ大統領は敬虔なクリスチャンだが戦争をしている。宗教が戦争の歯止めになる面があることは確かだが、逆に戦争を起こす要因にもなっている。

#### [ 男は戦争をしたがる？ ]

( A ) ヒットラー、ムッソリーニら戦争を起こしたのは男だ。男は戦争をしたがる傾向があるのではないか。

( D ) 子供を持つ母親として、子どもが殺されるのも嫌、人を殺すのも嫌、という気持ちは非常に強く感じる。

( E ) 平和活動でいろいろな人の話を聞くと、女性は直感的に考え、戦争は嫌という気持ちが強い。

私は「正しい戦争はあるか」という質問には迷う気持ちがあるが、人を殺す戦争に「正しい」ものはないと思う。

( C ) 古代ギリシャのアリストパネスが書いた「女の平和」という劇がある。女性が戦争終結を要求してセックスストライキをするという内容だそうだ。

男性が戦争をしたがるという話が出たが、イギリスのサッチャーはオークランドで戦争をした。第 2 次大戦の頃はどこも指導者は男だったから、女性がリーダーになれば戦争がなくなるかどうかはわからない。

#### [ 戦争と人権 ]

( B ) 戦争を考える上で 3 つのポイントがあると思っている。それは、自衛、人権、宗教だ。

人権に関して言うと、江戸時代は 300 年近く平和だったと言われている。しかし、実際には権力によって人権を抑え、戦争のない状態を作ったという意味での平和だった。司馬遼太郎は江戸時代をあまり評価せず、江戸時代より戦国時代のほうが人間にとって良かったというようなことを書いている。平和が続いても人権が抑圧されている状態もあることは認識しておく必要がある。

( H ) 確かに人権が抑圧された中での平和な状態と、人権は抑圧されていないが戦争状態という両方ありうる。

東西冷戦時代の東欧はソ連が押さえていたから（一部を除き）表面上は平和が保たれていたが、ソ連崩壊後はソ連の締め付けがなくなって、民族的な戦争が起こった。

[ 前回の問題提起の話に関連して ]

- ( C ) 「アメリカからの手紙」よりドイツからの「アメリカへの手紙」の方を支持したい。9・11で死んだ人とアフガニスタンで死んだ人は同じ扱いをすべきだと思う。  
「アフガニスタンで意図せず殺された」という話が出たが、「意図せず」というのは本当かという疑問を持つ。
- ( B ) 人種差別もあると思う。白人以外の命には軽い気持ちしか持っていないのではないか。もし白人同士ならもっと慎重にやったはずだ。
- ( H ) 前回の問題提起では、「意図せず」や「やむを得なかった」ということを先取りしてはいけない、という話があった。つまり、攻撃した後で、市民が巻き込まれたのは「やむを得なかった」と言うけれど、それは攻撃する前からわかっていたことはらずで、最初からわかっていたことに「やむを得なかった」とか「意図せず」という言葉を使うことはおかしいという指摘だった。

[ 正しい戦争はあるか：自衛、国益、人道的介入、etc ]

- ( C ) 歴史において正しい戦争かどうかは、戦争を始めた時は戦争を起こした側が決め、戦争が終わった時は勝った側が決めている。  
ただ、戦争を全て正しくないと言ったとしても、攻めた側と攻められた側を両方正しくないと言えるだろうか。どちらも悪いとは言えないということから、自衛の話にならざるを得ない。  
先の戦争は日本が中国に出て行ったのであって中国が日本を攻めたわけではないので、自衛とは言えない。  
また、イラク戦争はアメリカがイラクに攻めていった。大量破壊兵器があるからという理由だった。後に大量破壊兵器がないことが明らかになったが、もし、あったとしても、なぜそれがアメリカがイラクを攻撃する理由になるのか。アメリカは核兵器をたくさん持っている。その国が大量破壊兵器を持っていることを口実に攻撃することは理屈上おかしい。
- ( H ) 自衛の問題と、ユーゴでのように他国で虐殺があった時に放っておくか、の2つの問題が最後まで残るだろうと思っている。しかし、明らかに自衛とは考えられない場合でも自衛という名の下に戦争が行なわれることがまず問題で、そこを区別しなければならない。  
1990年にイラクがクウェートに侵攻した時、もしクウェートが反撃していたら自衛戦争として認めなければならないだろう。アメリカが攻めたのも完全に間違っているとはいえない。しかしながら、その後のイラク戦争は戦争以外の手段もあったのに戦争を行なった。湾岸戦争は認めてもイラク戦争は認められない。日本では両者がしっかりと区別されず、全部認めるようになっていることが残念だ。
- ( B ) アメリカは攻められたことは無いので自衛ではなく、国益で動いている。
- ( A ) 国益が最高価値であるかのように政治の場で語られている。簡単に国益という言葉を使っていいものか疑問を持つ。
- ( H ) 国益という言葉は十数年前まではほとんど聞いたことがないように思う。おそらく戦後は日本の利益が世界の利益と同じだという意識があったために国益という言葉は使わなかったのだろう。それが冷戦後、世界の利益と日本の利益が一致しないと考える人が増えて「国益」という言葉がよく聞かれるようになったのではないかとと思う。
- ( A ) 国益という言葉の後ろにはナショナリズムが控えている。ナショナリズムの延長線上には何が生まれる

のだろうか。自衛という言葉も、正当化のための隠れ蓑のように思える。言葉はひとり歩きするので言葉の危うさに注意しなければいけない。今は「そもそも」と深く考える余裕が失われている。

(D) 突き詰めて考えるとうさがられたりする。

(C) イラク戦争はアメリカの国益のためにやったものだと思うが、アメリカの国益という場合に、アメリカに住む全ての人の幸せか、一部の人の幸せか、の区別は必要だろう。

(H) 国益という場合、経済的領域などでの利害関係でもめることはある程度あると思うが、アフガニスタン民衆が死んでもアメリカの国益にとっては関係ないという発想になると問題は深刻だ。国益を主張すればその国の行動は許されるということになってはいけない。

アメリカが間違っただけを取った場合、日本は最低限、懸念の意くらいは表明しなければいけない。さらに、今ではアメリカ国内でもイラク戦争開始時の判断の誤りを認めているにもかかわらず、日本政府は認めていない。アメリカでは後になって当時の指導者が間違いを認める場合があるが、日本ではまずない。変える一つの手段は公文書の公開だろう。ある時期が来れば公開という制度ができれば、公開されると話をする人も現われるし、後で公開されるからしっかり判断しておこうという意識も働くだろう。

(C) 私自身アメリカの行動を批判しているが、一方でアフガニスタンでタリバンを放っておいて大丈夫かとも思う。ただし、アフガニスタン戦争で決して良くなっていない。

ベトナム戦争の始まりはトンキン湾事件(1964年)だ。アメリカ軍が国籍不明の船から攻撃されたということだったが、後ででっちあげだったことが明らかになった。

イラク戦争でもイラクとタリバンの関係はなかった。それでも批判が少なかったのはイラクのフセイン政権がひどかったことがある。人権が守られている民主国家であると世界的に認知されていることが攻められる口実を防ぐことにつながる。

(O) 人権が守られていない国でも例えばミャンマーをアメリカは攻撃していない。人権を抑圧している国家というのは口実に使っているだけだ。どんな国家の状態であっても主権国家を外国が攻めることは問題の解決にならない。

(C) 実際にイラクは何も良くなっていない。

(B) アメリカは占領して良かった国の成功例が日本だと宣伝している。憲法もアメリカ主導で作って確かに民主国家となった。

(H) 日本はなぜうまくいったのだろうか。

(B) 一般的には天皇制を残して国民の一体感を保つように考慮したことが挙げられている。

戦後、学校での教育が民主主義礼賛が変わって教師の教える内容が180度変わったけれど、反対が起こったと聞いたことがない。悔しかったけれど仕方なく変わったのか、本心で喜んで変わったのか、どちらなのだろう。

(O) それまで抑圧されていたことからの解放感が大きいのではないだろうか。

(B) もし北朝鮮で反政府的な反乱が起き、アメリカが介入し民主主義国になったら、それは正しい戦争なのだろうか。それとも放置して反乱がつぶされるのを見過ごすべきなのだろうか。

(C) 湾岸戦争はイラクがクウェートから引いたので攻撃をやめた。クルド人が決起したが、アメリカが手を引いたので虐殺につながった。

#### [ 構造の問題 ]

(C) 日本は間接的に戦争に協力した面はあるが、60年以上戦争をしていない。しかし、アメリカは絶えず戦争をしている。

(O) アメリカは産業構造に軍事産業が取り込まれている。軍事産業を止めるとアメリカ産業が成り立たない

と書いている学者もいる。日本で最近、守屋前事務次官の事件があったが、単に個人の問題ではなく、防衛産業がらみだ。日本もこの事件を中途半端に終わると、アメリカのようになってしまう可能性がある。

- (H) 日本で武器輸出3原則を緩める方向に動いている。いったん緩めると継続して売らないと利益が出ないので戦争が起こるほうが儲かる体質が日本にもできる可能性がある。そういうシステムができてしまうとなかなか崩せないのシステムができる前に止めなくてはならない。

[最後に]

- (H) 「正しい戦争はない」と言いたい、今は言い切ることができない。戦争に訴えなくても解決できる別の手段が常に残るようにできれば「正しい戦争はない」と言い切ることができる。このような仕組みを作ることが課題だと思っている。
- (O) 「正しい戦争はあるか」というテーマを聞いたとき、抽象論になるだろうと思った。私たちは具体的な事実をあまり知らない。部分的な知識による抽象的な議論を乗り越えて、トータルな議論をしていく必要がある。戦争の発端は何で、何が間違っているか、そして解決していく筋道はどうか、を考えていければ良い。いろいろな意見を出し合って、違いがあってもそれを受け入れ、お互いの研鑽をしていくことができれば良いと考えている。

以上

次回予定

【日時】2008年3月9日(日)13:30~15:30

【場所】かしはら万葉ホール3階会議室

【内容】兵役拒否

## 前回（第7回：9月2日）の問題提起の概要（議事録より抜粋）

文責：浜田

タイトル：『現代の正戦論』～「アメリカからの手紙」と「アメリカへの手紙」～

奈良女子大学文学部 准教授 柳澤有吾氏

### 【内容】

#### （1）アメリカからの手紙

- ・2001年の9・11同時多発テロとその後のアフガニスタン戦争について、「私たちは何のために戦っているのか - アメリカからの手紙 -」という声明を、S・ハンチントン（「文明の衝突」の著者）、F・フクヤマ（「歴史の終り」の著者）、M・ウォルツァー（正戦論で著名）らが発表。

#### [アメリカからの手紙の内容]

- ・悪を阻止することが最も重要な時があり、戦争に訴えることが必要な場合もある。ただし、全ての戦争を肯定する「現実主義」（下記参照）は認めない。

戦争に対する立場を次のように整理する

無差別主義 { (絶対的) 平和主義・・・全ての戦争を否定  
                  { 現実主義・・・・・・・・全ての戦争を肯定

差別主義                   正戦論（戦争の必要悪の性格を認めながら最小限となるよう枠をはめる）

- ・戦争に踏み切っても良い場合の第一は、無辜（ムコ）の人々を危害から守ること。
- ・武力に訴えなくても良い可能性があれば非暴力的手段を取るべきである。しかし、攻撃者が抑えがたい敵意に突き動かされている場合は武力行使が正当化される（9・11を念頭に置いている）。
- ・戦闘員を目標にした爆撃による意図しない非戦闘員の死はありうる。

#### （2）アメリカへの手紙

- ・「アメリカからの手紙」に対して、ドイツから「アメリカへの手紙」が送られた。アフガニスタンへの爆撃の結果、4千人以上のアフガニスタン一般市民の命が奪われている。無辜の人々を守るという考えはアフガニスタン一般市民には当てはまらないのか。
- ・上記に対する「アメリカからの手紙」第2信  
9・11の犠牲者とアフガニスタン市民の死者を一緒にしてはいけない。9・11はオフィスを計画的に狙って多くの命を奪ったのに対し、アフガニスタンでの死は、市民の死者を極力出さないようにした中で意図しない死である。
- ・さらにこれに対してドイツから第2信が送られた。9・11で計画的に殺された人々とアフガニスタンで意図せず（うっかり）殺された人々とに道徳的な重みに違いがあるのか。正しい戦争という言葉が乱用され、言い訳や合理化に利用されているだけではないか。

#### （3）まとめ

- ・「正戦論」は全ての戦争は正しいという考えを否定し一つのハードルを設けてはいるが、戦争の正当化に利用される結果になっている。
- ・「正しい」と最初に掲げられた戦争に「正しさ」はない。もしかしたら、やむをえなかったと後から考えられる戦争はあるかもしれない。しかし、それを最初から先取りして正当化することは許されない。

#### （4）最後に

- ・人道的介入と呼ばれるユーゴ空爆があった。ユーゴで大虐殺があり、日々人が死んでいった。そういう状況の下で戦争は良くないから何もしないということの良いのかというジレンマがある。
- ・何もしなくても人が死んでいく、手を出せば戦争で人が死ぬ。そこで行なう空爆は正しいのか、正しくないのか。人が死ぬという意味ではどちらも正しくない。正しくないけれどやらなければならないことはあるのか。それはやむをえないという意味で正しいのか。
- ・もし絶対的平和主義だけで世界がうまくいかないとしたらジレンマにどう向き合っていくのか。そういう時に何を正しいと呼んでいいのか、を考えていかななくてはいけない。それが私の課題でもあり、できれば皆さんにも考えてもらいたい。